第36回ＩＣＡ円卓会議
参加報告

秋田県公文書館　**柴田　知彰**

第36回ＩＣＡ円卓会議は、2002年11月12日(火)から16日(土)にかけての５日間、フランスのマルセイユにおいて開催された。会議は旧港に臨む岬にあるファロ宮の地下ホールで行われ、270人有余の大人数が参加した。会議の参加枠はＡカテゴリー（国立アーカイブズ機関）とＢカテゴリー（アーキビスト団体）の２種類ある。今回は、Ａカテゴリー枠で国立公文書館から３名、Ｂカテゴリー枠で全史料協から柴田知彰が代表参加した。

今回の会議テーマは、「社会はいかにアーカイブズを理解しているか（How Does Society Perceive Archives？）」であった。すなわち、普及論の問題である。日本では、1996年に秋田市で開催された全史料協の第22回全国大会が、「文書館制度の普及」として近いテーマを扱っている。会議テーマは４つのセッションに分けられ、28人の発表者から各国のアーカイブズ普及事例等が次々と報告された。報告された事例から、諸外国のアーカイブズ普及は、日本と比較し、各方面から積極的かつ戦略的に行われている印象を受けた。が、反面、諸外国でも日本との程度の差こそあれ、アーカイブズは未だライブラリーほど社会一般に理解されていないのではないか、とも感じられた。それゆえ、社会への普及活動が、かくも重視され論議の対象になるのだろう。普及活動の重要性を再認識させられた。また、各セッションの内容を見て、アーカイブズの普及戦略の基本的な方向性は、諸外国も日本も共通すべきと思われた。行政および一般市民、そして利用者の各面での普及が必要である。

日本の場合、行財政改革により文化的施設が統廃合される厳しい状況も、今後予想せざるを得ない。しかし、このような時期だからこそ、文書館事業における普及活動は緊急課題として見直されるべきではないか。その上で、諸外国の事例に学び、その長所を取り入れていく姿勢

が必要である。

小川千代子氏の報告

第１セッションでは、日本から小川千代子氏が「国際資料研究所によるカテゴリーＡメンバー調査の報告」の題で発表する予定であった。しかし、直前に小川氏が都合で参加不可能となり、報告はアジア歴史資料センターの牟田昌平氏により代読された。

小川氏の報告は、国際資料研究所が2001年から2002年にかけ全国のアーカイブズ機関を対象に実施した統計調査に関してである。現在、アーカイブズに関する国際的な統計年鑑は全く存在しない。1988年にパオラ・カルーチ氏（2001年現在イタリア中央文書局）が最初の統計調査を実施した後、15年近い長きにわたりデータが更新されない状態が続いていた。その間、ＩＴ革命や電子政府化など新技術の登場があり、冷戦構造の終結など国際情勢の変化があった。こうしたアーカイブズ世界を取り巻く環境変化もかんがみ、国際資料研究所によってカルーチ報告の追跡調査が行われた（この調査は、静岡大学情報学部のアーカイブ広域プロジェクトの一部として、ＩＣＡの支援のもと実施されたものである）。

小川氏は、アーカイブズ機関の調査をＩＣＡの定期活動に組み入れ、信頼性の高い情報源として「ＩＣＡ統計年鑑」を刊行することを提唱されている。私個人としても小川氏の意見には賛同するが、国際的な統計年鑑がアーカイブズに存在しない事実にまず驚かされた。

「ＩＣＡ統計年鑑」が定期刊行されるまでは、国際資料研究所の統計調査が最新データとなる。その意味で、小川氏の報告は世界に誇るべき成果と言えよう。同研究所の統計調査が日本国内で公開され、多くの文書館関係者に利用される日の早からんことを願うものである。国際交流は、国内普及を伴って十全たり得る。

今後の予定

第37回ＩＣＡ円卓会議は、2003年10月に南アフリカ共和国のケープタウンで開催される予定である。2003年11月には、第１回世界情報社会サミットがスイスのジュネーブで開催の予定である。ＩＣＡ大会は、2004年８月にオーストリアのウィーンで開催される。また、2004年におけるＩＣＡの機構改革案も提示された。

全史料協の代表派遣体制について

今回は、小川氏にかわり私が全史料協の代表を急遽代行した。そのため、小川氏に対し準備されていた派遣体制が、そっくり私に対し引き継がれることとなった。全史料協では、ＩＣＡ／ＳＰＡ専門家団体部会員である小川氏をもって、円卓会議に代表派遣する形がながらく続いていた。同氏ぬきでの代表派遣は、近年無かったことである。そこで、今回の派遣から気が付いた点を若干書き留めておきたい。

円卓会議への代表派遣は、全史料協がＢカテゴリー、すなわち日本のアーキビスト団体として参加するものである。しかしながら、その派遣体制は、組織的な事務に基づいているとは言い難い。会議参加は毎年の定期事業であり、参加登録以下の事務手続は担当の総務委員会で一定のマニュアル化されていて然るべきである。が、実際には、それら事務手続は、被派遣者個人の負担に掛かる部分が余りにも大きかった。個人の仕事と組織の仕事とが、いまなお未分離のように見受けられる。これは全史料協の代表派遣が個人の技量と経験に依存し、組織として事業推進体制が未整備だったためだろう。組織活動においては、個人の仕事との区分が曖昧な状態は近代的とは言えず、事業継続の不安定にもつながる。

全史料協としては、長期的な国際交流活動の継続のため、ＩＣＡ等国際会議への代表派遣体制を整備確立すべき時期に来ているのではないか。

柴田知彰訳：

第36回ＩＣＡ円卓会議決議（案）

マルセイユ、2002年11月12～16日

第36回円卓会議は

1．旧抑圧体制の被害者および研究者の緊急要請に鑑み、民主主義への移行段階の国々の政府が、史料へのアクセスを容易にするため、自由主義化への過程を開始し積極的に継続すること；

2．ラテンアメリカ諸国の地域における公正な社会と調和の建設に向けての努力、同様に虐待の被害者である市民の関わる警察記録にアクセスする要求の合法性にも鑑み、UNESCOとICAが警察記録を他記録と同一に扱いかつ保存するための地域的計画を発展させること；

　国立公文書館に譲渡された警察、執行委員会そして病院の記録を持つ関係諸国の政府が、それらの調査分析とアクセスを被害者の家族のために容易にすること；

3．ICAのメンバーが、意思に反した免職や移住をさせられた家系の人々に対し、系譜の情報にアクセスする手段の発達を促進すること；

4．国際的レベルで人権団体により集められた記録群、そして、これらが確実に国際社会で社会的かつ教育的な価値を拡大することに鑑み、ICAがその史料学的な調査分析、保存そして接近の援助を促進すること；

5．公的権力が、文書館と記録管理局を、総括的かつ横断的レベルに、充分な構成および記録作成者の権益に効果的に干渉できる力を与える戦略的な階層位置とともに位置付けること；

6．行政機関と国立公文書館が、公的部門における音声記録の管理を促進するため、責任ある全てのレベルにおいて、記録の管理者と作成者に妥当な訓練の与えられることを保証すること；

7．2002年９月に南アフリカ共和国で開催された英連邦アーキビストおよびアーカイブ教育者の討論会は何一つ目的を達成しなかった。

　電子時代に明確に基づいた管理のため、世界銀行の主導力を保証すること、そして他の言語世界へと拡大すること；

8．社会においてアーカイブズ機能への認識を若い人々に惹起する重要さを鑑み、国立公文書館が、教育担当大臣の協力を得て、学校における教育プログラムまたはサービスを確立すること；

9．アフリカ古代の手書き写本の保護が脅かされていることに鑑み、これら書類を保護し、かつアフリカ諸政府に保護を確実にする法律可決を奨める汎アフリカ機構の組織を守ること；

10．世論の中にアーカイブズとそのサービスの概念を広げる必要に鑑み、ICAがUNESCOの協力のもと、2004年からアーカイブズ国際デーを創設すること；

11．記録と史料が情報社会の核心であることを思い起こし、電子的環境における弱点は未来社会に向けての確実な保存のニーズにあることを自覚すること；

　貧しい国と富める国の間、また社会の中におけるデジタルデバイドの削減に関連して2002年５月に「世界情報社会サミットのための北京準備会合」で採択された勧告を呼び起こしつつ、記録と史料の長期的な必要性が考慮されるだろう最終宣言と行動計画が採択されるサミットへの代表者の派遣を政府に促すこと；

12．なおその上に、2003年の第37回円卓会議において、達成経過を報告するためにICA実行委員会を招待すること

13．専門的討論のシミュレーションを可能にすることに貢献したアーキビスト達の評価を記録に留めること；

を勧告する；

　最後に、フランス政府、地方行政局、フランス国立文書館の理事および職員の方々に対し、あたたかい歓待、すばらしい手腕と大会組織の成功に謝意を表するものである。

研究報告一覧

各セッションのテーマ	個　別　報　告
1　アーカイブの意味するもの	司会　ハビバ・ソン・ヤハヤ（マレーシア） **①一般市民の中で** ◆アントワーヌ・プロスト（仏） フランス「ル・モンド」の世論調査 ◆マリアンヌ・シャビン（仏） アーカイブ・アーカイブズの使い方：新聞記事比較分析 ◆レイヨス・ケルマンディ（ハンガリー） 旧ソ連圏諸国におけるアーキビストのアイデンティティ **②公的機関におけるアーカイブ作成者たち** ◆小川千代子（日） 国際資料研究所によるカテゴリーAメンバー調査の報告 ◆アハメド・アデム（エチオピア） 行政部門の文書作成者にとってアーカイブとは：事例報告 ◆アレクサンドル・チューバリヤン（露） ロシアの民主改革とアーカイブズの役割：社会の反応
2　増大する諸要求	司会　クリストフ・グラフ（スイス） **①社会の求めるもの** パネル・市民の多様化と諸社会における歴史と記憶への要求 ◆ジェラール・エルミス（仏）　フランスのアーカイブ利用者 ◆ラモン・アルベンチ（スペイン）　市立アーカイブの利用者 ◆アナ・マリア・セクビニ・ド・ダロ（アルゼンチン） かつての抑圧体制の犠牲者たちの諸要求 ◆サリウ・ムバイエ（セネガル）　口承伝統の国々 ◆ノルダ・レマー・ケネパ（蘭領アンチーユ） カリブ地域の求めるもの ◆ヘナディ・ボリアク（ウクライナ）　変革期を迎えた国の場合 **②アーカイブニーズの新分野** ◆エリザベト・ベリー（仏）、アンゲリカ・メンネハリッツ（独） 雇用のあり方の多様化をめぐって ◆マーガレット・ターナー（英） 今、アーカイブ専門家の魅力とは？

3　政府と一般市民にむけたアーカイブ普及戦略	司会　オラフール・アスゲイルソン（アイスランド） **①政府とアーカイブ作成者に向けて普及浸透を図るには** ◆モンセフ・ファクファク（チュニジア） 行政におけるアーカイブ観の変容条件 ◆エリーゼ・パライソ（ベニン） アーカイブ作成者のトレーニング ◆ハルトムート・ウェーバー（独） 公共アーカイブの普及に向けた透明性と説明責任 **②一般大衆の中の情報・通信ポリシー** ◆毛富民（マオフウミン）（中） 中国におけるアーカイブ振興の実践と展望 ◆ジョン・カーリン（米） 記録内容：合衆国国立公文書館の経験の進展 ◆エリザベス・オックスボロ・コワン（英） イギリスの国立公文書館月間 ◆マリア・イザベル・ド・オリベイラ（ブラジル） ブラジルの国立公文書館：市民への奉仕のための団体
4　利用者に対するアーカイブ普及活動	司会　イアン・ウィルソン（加） **①利用者の中へのアーカイブ振興** ◆サルバトーレ・イタリア（伊）　浸透作戦：イタリアでは ◆マリー・ポール・アルノール（仏） 文化的・教育的事業：フランスにおける反響の状況 ◆ジャン・ウィルフレッド・バートランド（ハイチ） ハイチにおける文化遺産を取り入れた教育プログラム **②利用者サービスの改善** ◆フェデリコ・バラチ（伊） ウェブサイトとアーカイブ調査 ◆エリザベス・ヤケル（米） インターネットが与えたアーカイブ利用とアーカイブ利用者へのインパクト ◆マリールイズ・ペロン（加） カナダ系図センター：カナダ国立公文書館のサービス向上における主導力 **③ＩＣＡと情報社会** ＷＳＩＳ　ワールド・サミットへむけてのＩＣＡ提案
まとめ	**中期計画の展望**